

長谷川四郎全集

第十五卷

長谷川四郎全集第十五卷

一九七八年六月十五日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二

電話東京二五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)

振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七八年(検印廃止)落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集 第十五卷 晶文社



1 中国服のブレヒト

9

2

「小市民七つの大罪」解説にかえて

135

『コイナさん談義』訳者の注

136

『コイナさん談義』訳者あとがき

137

ブレヒト「セチュアンの善人」について

142

ベルトルト・ブレヒトの詩

170

詩人ブレヒト

173

「胆っ玉おっ母とその子供達」について

180

『ギヤングⅡアルトウロ・ウイ』

182

アルトウロ・ウイ

185

『ウイ』の翻訳について

187

翻訳劇について

190

ベルトルト・ブレヒト

192

3

『ベルトルト・ブレヒトの仕事3 ブレヒトの詩』解説
 193

195

B・ブレヒト『ユリウス・カエサル氏の商売』『ブレヒトの政治・社会論』
 翻訳もまた日本文学であるべきだ
 199

チューリヒのブレヒト——その二つの仕事
 204

はなたきよてる

はなたきよてる
 209

芝居に行きますか
 211

“日本のルネッサンス人”の死
 215

否定によって肯定する人
 218

『故事新編』と花田清輝
 220

花田清輝のプロフィール
 222

先祖しらべ
 225

花田清輝と芝居
 237

集団に埋没する匿名の精神
 243

戯曲『故事新編』まえがき
 241

花田清輝一回忌に思う
 250

佐々木基一・開高健編『わが内と外なるヒトラー』

255

アンリ・ルソー

257

小さな出来事

263

佐々木基一『ウィーン・鏡の中の都』

265

飛行船

268

笑う人間と落語精神

270

外洋での日本人

276

八重樫実『冬の燕』序

278

野川記枝『行旅死亡人』

281

わが町わが本

284

桑原甲子雄写真集『満州昭和十五年』に寄せて

286

堀田善衛

287

おそ牛も淀

289

アジアと民族について思うこと

295

小沢信男詩集『赤面申告』跋

297

『長谷川四郎の自由時間』あとがきの歌

299

すきとおって、うらおもてがなく

300

『デルスー・ウザーラ』訳者あとがき

302

金達寿

309

道化服の海尊さま

317

小林勝

323

往事茫々

330

ロータス賞と金芝河

332

小野十三郎『自伝空想旅行』

336

人間界の帰着点

337

きみはそこで何を聞く

339

『自由時間』という小さな雑誌

340

編集者の独白

342

幽霊はどこにでもいる

343

小沢信男『東京の人に送る恋文』

345

北海道の地名

347

作者のノート・15

353

解題 福島紀幸

359

1

中国服のブレヒト

交朋來哭我來歌
無限青山蔽綠蘿
四海十年人殺盡
似君埋少不埋多

杜荀鶴

はしがき

これらの文章は月刊雑誌『みすず』の一九七〇年七月号から一九七二年五月号まで十回にわたり連載されたもので、初めは一回だけで終るつもりであったのを、編集者からつづけて書けといわれ、その気になって書いたのですが、毎号、二三日で書き、杜撰であったのを、このたび全面的に改訂増補して一冊の本にしたものです。依然として意に満たないところが多いですが今はこれ以上やれません。

この本が出版されるに値いするかということよりも、ぜひ出版してもらわなくては困るというのが、まず第一に考えたことでした。それはすでに雑誌で公けにされたのに不満の点がたくさんあるので、そのままにしておくわけにはいかず、なおすとす

れば、もう本という形式にたよるしかないからでした。それから、出す以上は出すに値いするだろうと思ったのです。

一つには原書解説という試みをやっていて、これは必ずや読者に興味のあるところでありましょう。ドイツ語はたいへんむずかしい外国語ですが、字引きひきひき、できるだけやり、そしてあるものはわりとうまくいき、あるものはうまくいきませんでした。が、これも、どうやら読めるていどにはなっていると考えます。原書にはまだまだたくさん章句がふくまれています。が、いずれは何人かによって、そのすべてが、よりうまく紹介される日がくるであります。

中国の古典については、そのほんの小部分を、以前に先輩から教わったものですが、それをこのたび、自分から改めて註釈書のために勉強したのです。そして大いに教えられるところがあり、それもこの本の中に書きました。いってみれば勉強の経過を示したものです。これが西洋の原書解説と共に読者にとって少しでも得るところがあればよいがと考えて、また批評を心待ちにして、

これを出すのです。

貧弱な生活者ですが、とにかく現代に生活しており、この生活の中で考えたことも書きました。西洋詩人の紹介とともに、あるいはそれを利用して、自分の凡庸なる考えも、遠慮せず、だが多くならないように出しました。あんまり目ざわりでなければよいがと思います。

ある一冊の外国の本を翻訳してそれに解説をつけて出すというやりかたではなく、この二つを一つにまとめて、翻訳の部分は少なく解説のほうが比較的多いというような本になりましたが、この解説はかなりこつちの自分勝手なところがあるのではないかと恐れます。書き方も断片的というか、飛び飛びの個所が多くて、読みにくいと思いますが、これはわざとそうしたのではなく、そうせざるをえなかったからです。飛び飛びといっても、どこかにつながりがあるだろうと、自分ではそのようなつもりでいます。

客観的であろうと努めて、だがやっぱり主観的だといわれるような、そういう筆づかいによる、これは一人の西洋詩人の下手くそな肖像といえるかと思います。同時にまた、この西洋人と直接の関係はないけれども、たまたま、書いている人、つまり自分の身辺にあることも出てきて、またべつの、というのは書き手のらしい顔も見えるだろうと思います。

さつき全面的に改訂増補したといいましたが、もとの形と時間帯はそのままにしています。この時間帯というのは、ちょっと前の過去のこと、それは佐藤首相時代で、今は田中首相時代だ

という意味です。ここで少し書き加えたいと思うのは、中国と日本との交流がさかんになるにつれ、物品や運動競技や演劇などと共に「矛盾論」的思想も入ってきて底の方へ沈み、それがついに一つの物質的力になりはしないかという「心配」です。杞憂でありましようが、これはこれらの文章を書いていた時には、少ししか表面に出ていなかったものでした。

この本の中には読んだ本の名前がいくつか出てきて、それらの本からの引用が多いですが、たいていは町の本屋で、そう高くなく売られている本ですから、それを読んでたしかめたり、さらに多くのことをつかんだり出来るでありません。

今までにも幾らかの試みをやってきましたが、これもそういう試みの一つであり、ある一つの提案で、この本もまた、あるつもりなのです。

最後に近作の都々逸(?)を一つ。

歌った時はいい氣でいたが

録音きいてこりゃいかん(一九七二年九月末日)

1

このあいだ新宿の紀伊国屋書店へいってみたら、そこにプレヒトの『メーティ』があったので、さっそく買ってきたが、まあえからそういう本があることは知っていて、メーティとはなんのことだろうかと思っており、買って開いてみて、それが墨翟であることを知った。メーティとは Me Ti あるいは Mo Di で、墨翟の本来の中国音のローマ字書きであった。

墨翟の翟は墨子の呼名で――

悲しまんや墨子芹焼を見てもなお

と芭蕉の俳句があり。これを現代口語でいいかえるならば――「悲しむでしょうか、墨子は芹焼を見ても、やっぱり。」というこ

とで、あんまり強くはないにしろ、つまりは反語法であって「悲しまないだろう。」といっているのだと思う。

和歌や俳句には中国の故事や詩によったのがよくあり、例えば石の火は火打石の発する火で、電光石火。すぐ消える、はかないものであるから、これを生命にたとえ――「石の火にこの身をよせて世中の常ならずさを思知る哉」という和歌が『千五百番歌合』にあることを以前に『石の火』と題する、広島・長崎に原爆がおとされて幕切れとなる芝居台本を書いた時、『広辞苑』をひいてみて知ったが、これは白居易の『対酒』という詩に「蝸牛角上争何事、石火光中寄此身」とあるのを、いわば本歌どりしたのだらうと『携帯新漢和中辞典』をひいてみて考えた。

芭蕉の「明ぼのやしら魚白きこと一寸」は杜甫の「天然二寸魚」や李賀の「劳劳一寸心、灯花照魚目」という唐詩をふまえたものだときいたが（安東次男による）、そのふまえたは、足がばやけて消えて見えないようなものだが、そこへいくと「悲しま

んや」の句は、そのふまえたという墨子の悲染の故事を知らない
と、なにをいつているのかよくわからないので、こんどは神田の
古本屋街へいき、牧野謙次郎講述『墨子国字解』上下二冊を買っ
てきた。悲染の故事は『墨子』巻之一の「所染」篇に出ていて、
その書き出しはつぎのようなものだ。

——墨子先生は糸を染める者をもて、歎じていうのに、蒼に染
めれば蒼、黄に染めれば黄。入れるところのものが変わると、色も
また変わる。五たび入れると五つの色に変わっていく。〔……〕国を
治むる上にも、染めよう次第で善にも悪にもなる。まず善に染
みて成功した聖王をあぐれば虞の舜帝で、うんぬん。

『孟子』は墨子をしりぞけたそうだけれども、これでみると、悲
染の故事は孟母三遷の教えにも似た教育論であるようだ。

素糸は染めようで、どんな色にもなる。であるから、「悲しま
んや」の句を、さらにパラフレーズするならば——「白い糸がい
ろんな色に染まるのを見て悲しんだ墨子であるが、はたして彼は
芹焼を見ても悲しむであろうか。」ということになると思うが、
これでもぜんぜん未だしである。というのは、かんじんの芹焼と
はどんなものか、知らないからだ。

柳田國男は『俳諧評釈』（筑摩版定本柳田國男集第十七巻）の
はしがきで

——俳諧が第二芸術であるかどうかといふことは、すこぶる面
白い問題のやうに考へられるが、是を作者自身に問ひたゞして見

ても、芸術といふ語さへ無かつた時代の人なのだから、答へが得
られないことは先づ確かである。たゞあの人たちはちゃんと心得
て居て、今の人に忘れられさうになつて居ることは、俳諧は作者
に最も楽しいもの、読者はせいふ／＼それと同じ楽しさを味はふの
が先途で、それも人が変り世の中が推し移れば、次第にわからぬ
ことの多くなるものだといふことである。

と書いていて、みずから、俳諧とわれわれの間に立ち、註解と
仲介の勞をとつてくれた。むかしは神社の拝殿で歌仙をもよおし
出来たものを額にして、その神社に奉納したりしたそうだが、こ
ういう人たちがおつたとは、現代にして思えば、まことに人が変
り世の中が推し移つたものだ。

芹焼の句は俳諧連句の中におさまっていたものではなくて、い
わば孤立した一句であるが、いずれにしろ、身はすでに六十の坂を
こえたとはいえ、もつとオールドな先生にうかがつてみないこと
にはわからない。そこで見当をつけて、図書館へ出かけていった。
『続芭蕉俳句研究』（岩波書店）の中の幸田露伴の説によると、
芹焼はもとより芹の料理法であつたが、それは地面に穴をうがち、
この穴の底に石をしきならべ、その石の上で火を燃やして、それ
から火をとりのぞいて、石の上に田芹をならべておき、穴にフタ
をして、こうやって熱い石で芹をむし焼きにし、醬（ひしお）と
柚酸（ゆずす）で食べたのである。芹は白い糸のようであるから、
それがこの料理法にかかると、何色にとは書いてなかったが、と
にかくあざやかな色彩に染まって、見るからに綺麗なので、これ

を見ても、はたして墨子先生は悲しむであらうか。たぶん悲しくないだろう。と言っているのであって。ここにおいてか初めて、芹焼をたべたことも見たこともない身ではあるが、一句のユーモアを解することが出来た。

ちなみに芭蕉がふだんから、このんでたべたのは、煮ても焼いてもあんまり色の変わりそうにないコンニャクであったそうで——「蒟蒻とはまことにをかしきものを好けば好きしものかな。」と露伴は書いている（『讀言』）。

側側泣路岐

哀哀素絲

路岐有南北

素絲易変移

と李白の『古風』にあつて、青木正児はこれを——「楊子は、さめざめと分れ路に泣き、墨子はよくよと素絲を悲しむ。その故は分れ路には南と北とがあつて迷ひ、素絲は青くも黄いろくも染り易いからである。」と訳し、さらに註して——「戦国時代の思想家楊朱は岐路を見て哭いた、それは南へも北へも行けるからである。墨翟は練色を見て泣いた、それは黄いろくも黒くも染められるからである（淮南子）。」と書いている。おそらくは芭蕉の「悲しまんや」の出どころは、この「哀哀素絲」あたりにあつたのだろう。『墨子』という本そのものを、芭蕉が読んでいたとは考えられない。

楊朱も墨翟ともに諸子百家の思想家であるが、楊朱の本はまとまったものとしては今に伝わっておらず、墨翟の本は『墨子』一卷として伝わったけれども、それも二千年の長きにわたり日のめをみず、埋もれていたのであつて。ただ楊朱の「哭岐」と墨翟の「泣練」が、道の多岐なるをなげき、ともすれば他人にそまり自己の判断をあやまりやすいことを悲しむ故事として伝えられたにすぎないものと思われる。

——墨子は中国の近代において〈発見〉された。しかも、清朝考証学と民国初期の西欧思想の影響の中から、さまざまな粉飾を施されて墨子が発見されたのである。発見されたということとは、従来無視されていたのであり、無視される条件と状況があつたからである。「政行」無視される条件とは、「墨子」書中とくに儒家の礼楽説を批判した非楽篇や反儒家的立場を露骨に示し孔子批判を行った非儒篇などに見られる、正統的思维に対する異端的思想が「墨子」の中に見え、また先秦の儒家たる「孟子」や「荀子」において批判されて、いわば異端的墨子像が定着してきたことである。また、秦漢帝国成立以後二千年のあいだ絶学となり無視された状況とは、かつて統一を求めそれにふさわしい世界観を模索した戦国諸子の思想的状況に代つて、天子を頂点とする王朝体制が成立し、人びとがその体制を前提としてその体制内に存在するようになり、いわゆる儒教の名教的世界が中国を支配してきたということである。